札幌保健科学雑誌　第７号　38－44（2018）

研究報告

自死遺族の夢の中での自死者との再会
ーナラティヴ・イメージワークを通してー

吉野淳一

札幌医科大学保健医療学部看護学科

本研究では，自死で配偶者を亡くした女性の夢の中での自死者との再会についての語りと描画の作業（ナラティヴ・イメージワーク）を報告する．研究協力者は，自死した夫の登場する夢を見て，それを記憶し，そして，研究者の求めに応じてその内容を語り描画することができた．夢に現れた状況は，夢見手によって把握され，音，温感，表情について報告された．夢中では，研究協力者と自死者との言語的な対話は成立しているとは言いがたく，研究協力者の問いかけにも自死者からは明確な言語的な回答はなかった．しかし研究協力者は，夢の中での自死者のふるまいから言葉を超えたメッセージをくみとっていた．そして，語られた内容のうち印象的な場面を描画することができた．これらから，自死者の登場する夢を語り描画する作業を通して，自死遺族と自死者そして研究者のあいだで対話的な関係が維持され，メッセージの持つ意味が共同生成されていることから，ナラティヴ・イメージワークが自死遺族の喪の作業の進展に寄与できることが示された．

キーワード：自死，自死遺族，夢，ナラティヴ・イメージワーク

Narrative image work illustrating the dreams of a bereaved woman in which she met her spouse lost to suicide

Junichi YOSHINO

Department of Nursing, School of Health Sciences, Sapporo Medical University

In this research, I report the narrative image work focusing on the narrative picture of a woman who dreamed she met her spouse lost to suicide. I studied her clearly remembered dreams in which she met her husband who had committed suicide. She was able describe the contents of the dreams and produce drawings depicting them. The situation that appeared in the dreams was well understood by the dreamer, and she reported sounds, a warming sensation, and various expressions. In her dreams, it was hard to say that linguistic dialogue between the participant and her husband was established, and there was no definite linguistic answer from the deceased to the questions of the participant. However, the participant received messages beyond words from the behavior of her husband in the dreams and she was able to draw impressive scenes on paper. Through the work of narrating and drawing images of the dream appearances of the deceased, it was shown that such narrative image work could contribute to the progress of mourning of a bereaved family who had lost a loved one to suicide because the meaning of the message was cogenerated by the interactive relations among the suicide survivors, the suicide and a researcher.

Key words：suicide, bereaved family, dream, narrative image work

Sapporo J. Health Sci. 7：38-44(2018)
DOI：10. 15114/sjhs. 7. 38

受付日：2017年11月６日　　受理日：2018年２月５日

＜連絡先＞　吉野淳一：〒060-8556　札幌市中央区南1条西17丁目　札幌医科大学保健医療学部看護学科

Ⅰ．はじめに

家族成員を自死で失うことは，遺された家族にとって計り知れない衝撃である．遺族は，なぜ成員は自死したのかといった，終わりのないなぜ[1]や見捨てられ感，拒絶された感じ，怒り，恥，自責などといった感情を経験させられる．日本の自殺研究の第一人者である高橋[2]は，遺された人々に起こり得る反応として，さまざまな形の「なぜ」，自殺した人のことばかり考える，等々を挙げ，その心理を解説している．高橋のここでの指摘は，自死遺族の自死者への過剰なとらわれを意味するものであるが，研究者はこの自死遺族の自死者への強い思いを彼らの対話的な関係を維持する原動力に転換し，家族成員の自死という現実を遺族が受け入れていくための自死遺族一人一人のストーリーの構築に寄与したいと考えている．その具体的な構想の一つが，夢という死者と再会可能な空間の活用である．

夢は，フロイトの精神分析やユングの深層心理学の立場では，無意識を指し示すものとみなされていることは広く知られている[3][4]．同時にそれは，夢を現実と一線を画す心像であるとの見解につながっている．現象学の始祖フッサールは，意識を特権化し夢を論じないが，その後に続くビンスワンガー，ボス，ウスラーらは夢を研究対象として扱い，その存在と意味を通して現実性を主張するに至った[5]．最近では，渡辺が「現実の世界で私たちが喜んだり悲しんだりするのと同じように，夢の中でも喜んだり悲しんだりする．だから夢世界は，現実世界と対等の，『世界』なのだ」[6]と述べ，夢を一つの世界として現象学の立場で研究し，その本質と構造を明らかにしようとしている．

本研究は一つのナラティヴ・アプローチであり，その理論的基盤は社会構成主義にある．社会構成主義では，現実はことごとく社会的構成の産物であり，関係性が現実を作り，意味は関係性の中で生まれる，と考える[7]．現象学によって夢が現実と対等の一つの世界であることが理解され，さらに社会構成主義によって，その世界の中での関係性が意味や現実を作ることが解明され主張されるようになったのである．本研究は，このような社会構成主義に依拠し，自死遺族とその夢に登場する自死者，研究者といった関係者の共同作業を通して彼らのあいだに対話的な関係を再構築し，新たな意味や現実を作りだそうとするものである．

実際に，社会構成主義を基盤にした悲哀へのアプローチでは，ホワイト[8]は病的な喪と診断されるような対象者とのセラピーに「再会」メタファーを導入し「喪失した関係を内包するような文脈を確立する」方向での悲哀の解決を報告している．ヘツキ&ウインスレイド[9]は，リ・メンバリングといった概念を用いて故人を思い出しメンバーシップを維持することで遺された人の人生物語を豊かにする実践を紹介している．ホワイトもヘツキ&ウインスレイドも，各々の実践は自死で家族を亡くした人の悲哀のアプローチにも有効であるとする．しかし，再会やリ・メンバリングをより鮮明に印象づける方法はないものだろうか．研究者は数年来，夢という出会いの空間を着想し，自死遺族に自死者の登場する夢の書き留めを依頼し，その夢について語り，自死遺族と共同で自死者との対話的関係の再構築に取り組んできた[10]．もしも，夢を語ることで，夢の中での死者との再会がより鮮明なかたちで明らかになり，夢を死者と再会可能な空間として自死遺族と共に再定義することができれば，「終わりのないなぜ」を抱える自死遺族の喪の作業を進展させるような好ましい影響を与えることができるに違いない．

研究者は，自死遺族の自死者の登場する夢についての語りを踏まえ，さらなる鮮明さを求めて自死者の登場した夢の描画作業に遺族とともに取り組んだ．夢の語りから描画を行い，その描画をもとにさらに語る．このような一連の作業を研究者は，ナラティヴ・イメージワークと名付けた．夢について研究者と協力者のあいだで語る機会を持ち，その語りをもとに夢の印象的な内容を描画してもらうことは，野口の言を借りれば「描画は一場面であるにせよ，プロットであるにせよ，対話なしにはその意味を確定することができない．それは必然的に治療者と患者の対話を引き起こすきっかけとして作用することになる」[11]のである．このナラティヴ・イメージワークは，研究者と自死遺族の対話を起点として，自死により分断された自死遺族と自死者の対話的な関係を再構築し，終わりのないなぜや否定的な諸感情を抱える自死遺族の喪の作業に寄与できることに期待するものである．

Ⅱ．研究の目的

本研究の目的は，家族成員を自死で亡くした遺族に自死者の登場する夢の報告を依頼し，研究者とともに夢の中での死者との再会について語り，印象的な再会場面を描画する作業を通して自死遺族と自死者の対話的な関係を再構築し，それらの喪の作業における意義を明らかにすることである．

Ⅲ．研究の意義

上記の作業を通して，自死遺族に自死者との対話的関係が維持されていることへの気づきを奨励し，終わりのないなぜに苦悩する自死遺族の喪の作業の進展に寄与することが期待される．

Ⅳ．研究方法

1．データの収集

本研究では，家族成員を自死で亡くした対象者に研究の

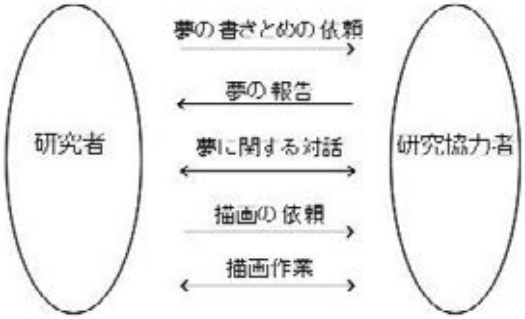

図１　夢に関する一連の作業

目的と方法と連絡先を記した文書を配布し，口頭でその趣旨を伝えて研究協力者を募り，研究に協力の意思を示してくれた人たちを研究協力者として同定し，研究の同意書と誓約書を研究者とのあいだで交わした．その手続きの後，研究者から自死者の登場する夢の書き留めを依頼した．夢を書き留めることができた遺族からは，電話ないしメールで夢の書き留めができたことの知らせをもらった．夢の書き留めに成功した遺族と面接の日程を設定し，面談の場で書き留められた夢について自由に語ってもらい，印象的な夢中の再会場面を描画してもらうといったプロセスを経た（図１）．ただし，本事例は夢を見た後，研究協力者となることを申し出られ，面談を設定するといった変則のプロセスをたどった．

２．分析の視点

既存の夢分析では，夢はクライエントの心の中で生じているイメージとして扱われ，分析によって夢見手であるクライエントの無意識に迫り，クライエントの連想の内容に沿って夢に埋め込まれた意味を探り解釈していく．しかし，本研究は，夢が現実世界と対等な一つの世界であるといった現象学の成果を踏まえて，夢も夢に登場する人物も日常の現実と等価の一現実として扱っている．さらに社会構成主義の世界観を頼りに，意味は関係の中で生まれ，関係が現実を作るとしている．これを受けて研究者は，夢に登場する自死者に生者と同じく一人格を認め，自死者の言動や振る舞いに注意を向け，自死者と自死遺族のあいだで交わされるメッセージに着目している．すなわち，夢は夢見手だけに由来する産物ではなく夢見手と夢の中の重要人物（この場合は自死者）のあいだのメッセージ交換の場であり，夢見手と夢の中の自死者とのあいだでその意味を共同生成できる空間であり，そしてさらに，夢見手と自死者に加え，その夢の報告を受ける研究者とのあいだでも意味を付与できる素材として位置づけることができるのである（図２）．

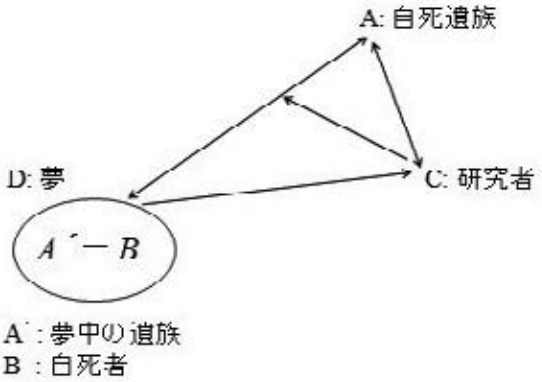

図２　自死遺族および夢中の遺族と自死者そして研究者の関係

３．倫理的配慮

本研究をはじめるにあたって，札幌医科大学倫理審査委員会の承認（平成25年2月13日付け）を得た．また研究協力者の権利を保護するため，書面と口頭で倫理的配慮について説明し同意書に署名を得た．開示すべき利益相反はない．

Ⅴ．研 究 結 果

１．事例

ここでは，夫を自死で亡くした配偶者が，夢中で亡夫と再会を果たした時の印象的な場面についての語りと描画を紹介する．

事例の50歳台前半の女性は大学を卒業後，手に職をつけるため専門学校に入るが，そこでの友人を介した付き合いの中で，亡くなった夫との出会いがあった．学校を終え資格を取得して職業についてから，改めて亡夫との付き合いがあり，結婚に至った．結婚後，夫は，仕事の都合で単身赴任状態になったり，仕事で配属されている部署の変更があったりして，仕事への思いが空回りし，そこでの人間関係に行き詰まり悩んでいるようすもあった．亡くなる数か月前くらいからは，自分は孤独であるとこぼすことがあったが，実際には趣味の集まりも続いていたので深刻には思えなかった．この頃には，夫婦関係もぎくしゃくし以前より気持ちは冷めてきていた．結婚後10年，自宅のドアにひもをかけて夫は45年の人生に自ら終止符を打った．インタビューは2014年1月に実施した（語りと描画あわせて43分）．インタビューの前に，事例の女性は自死遺族の会のメンバーと友人に対して，この夢の話をした経験を有していた．

研究者が主宰する自死遺族の思いを語る集いに参加された際に，周りの参加者に亡夫の夢の話をしたところ，夢の報告をしてくれる研究協力者を募っていた研究者への報告をすすめられ，自ら夢の体験を話してもよいと申し出てくれた．それまで，協力者は研究者の主宰する自死遺族の思いを語る集いに数回参加されていて，研究者とは既知の関係であったが，夢の話をしたことはなかった．日を改めて研究室で亡夫の登場する夢の語りと描画作業に取り組んでもらった．協力者は夢を書き留めたメモは持参されなかったが，淡々と落ち着いて夢の内容を研究者に話した．夢の

内容を語り描画するための面接は一回のみで完結したが，その後，学術雑誌への投稿の同意確認や近況確認などで3回研究者と電話で話をした．研究者に語られ描画された夢は，夫の自死後，1年3か月後に見た夢である．

2．夢の語り

夢のお話，思いつくままに話していただいてもいいですか，という研究者の切り出しに応じるかたちで夢の語りははじまった．pは協力者，rは研究者を表し，発話順に番号を付した．括弧内は，研究者の補足ないし解説である．近年，自殺対策やグリーフサポートに携る人から実際にどのような面接をしているのか，問われることが多くなった．これに答える意味でも面接の内容を以下のように逐語で報告することとしたい．

p_1：そのときは，なぜか寝付けなくて，なかなか寝付けなかったんです

r_1：はい

p_2：で，やっとこう，なんかザワザワって，ザワザワする感じ，あの，音が，ザワザワというかガタガタというか，音がなんかするような感じがして，それで，こう，ドアを開けたら，ま，そこからは夢なんですけれども，ドアを開けたら，ま，そこは○○の部屋，家で，人が何人かいて，5，6人と，夫がいて，なんかこうものを動かしている，運んでいる

r_2：ええ

p_3：で，ああ，これで眠れなかった，こうガタガタというか音がして

r_3：あー

p_4：ちょっと騒々しくて，あ，眠れなかったんだと思って，で，ドアを閉めたんですよ

r_4：うん・・・うん

p_5：で，ドアを閉めて，で，その時に，ドアを閉める前に，夫を呼んだ，呼んだのかな，そう，夫を呼んだ，呼んだ，で，ドアを閉めて，でも，こう，すぐ，夫は来なかったんですよね．気が付かなかったの．気が付かない感じで来なくって，

r_5：うん

p_6：で，ふっと思って，で・・・あ，みんながしてるのは，こう荷物を運んで，出してね

r_6：うん

p_7：こう，引っ越しの準備を，引っ越しをしてる，というのに気が付いたんですよ

r_7：うーん，荷物を運び出して

p_8：そうそう，運び出してる

r_8：引っ越しであると

p_9：引っ越し．で，黙って，引っ越して，行っちゃうんだと思って，で，ドアを開けて，で，またこう，呼んだら，他の人たちが，こう，他の人たちがね，いる人，5，6人，誰かが呼んでるよみたいな感じで夫に言ってくれて，で，夫が来て，寝室の方に来て，そして，で私が，どうして，ね，黙って行っちゃうのって，そういう，あの，引っ越すっていう，ことも，決まって，○○で引っ越す予定もあったから，また，引っ越しちゃうんだと思ったんだけれども，でもどうして

r_9：うん

p_{10}：黙って行っちゃうの？・・・って，聞いたら，彼はこう，黙って・・・そうね，うん，表情は，こう，どう（電話で中断）

r_{10}：（中断をわびて）どうして黙って行っちゃうのかって聞いたら，黙ってたんだけど・・・

p_{11}：黙って，もう，表情としてはもう，なんか，どうしようもないんだよーみたいな感じの表情

r_{11}：うん

p_{12}：で，黙って，こう，私の顔をジッと見て，で，そうっと，こう，キスをしてくれたんですよ．

r_{12}：うん

p_{13}：でその，でもそのキス，は，なん，感覚のなにも，そういう，冷たくも

r_{13}：うん

p_{14}：あたたかみも，そういう，なんに，なんの感覚もない・・・キスで，フッとそこで（顔が）離れたところで目を覚ましたんですよ

r_{14}：うーん

p_{15}：で，そこで，なんかはじめて，あ，もう，違う世界に，行っちゃったんだなって・・・

r_{15}：うーん

p_{16}：そこで，そう，あっ出てく，じゃなく，出て・・・こう，離れただけじゃ，こう，離れたというかね，うんその，出て行っちゃうよりも，もっと，遠い，違う世界に行っちゃたんだなっていう

r_{16}：うん

p_{17}：目の覚めた瞬間，こう，思って，なんかそこでもうワーって泣いちゃったんですけども

r_{17}：うん

p_{18}：その時が一番，その時に，そうですね，はっきりともう違う，世界というのを

r_{18}：世界が違う

p_{19}：そうですね，世界が違うっていうか，こう

r_{19}：うん

p_{20}：それまで亡くなって，亡くなったのはわかってても，なんかまだ会えるんじゃないかとか，そう，ま，フッと帰ってくるんじゃないかとか・・・でも，もう，その夢，それで，こう，もう違う世界に

r_{20}：うん

p_{21}：彼は行ってしまったっていう，のを，思ったのと

r_{21}：うん，思ったのと，

p_{22}：思ったのと，あと，そのー，仲間みたいな

r_{22}：うん

p_{23}：人がね，いたから，

r_{23}：うん
p_{24}：それで，あ，彼には，でももう，仲間がいるから，ていうちょっと安心感というか，よかったっていう安堵感
r_{24}：うん，うん
p_{25}：そう，その仲間って5，6人なんだけれども，なんか，はっきりわからないっていうか，5，6人いるー，男の人と女の人が，たぶん，2，3人ずつみたいな感じなんだけれども
（中略：以上のような対話は，この後，研究者の促しで図3に示したように描かれた．以下は，研究協力者の描画作業中に研究者とのあいだで交わされた対話である）
r_{25}：でも，あれなんですね，こういった，そのいわゆる一緒に作業してくれてる人がいることは，ちょっと，あの，違う世界に行くとはいいながらも，ちょっと，ホッとされるというか，ご主人がたった一人じゃなくて
p_{26}：あ，そうですね．仲間がいるということは
r_{26}：仲間とともにいること自体は，ちょっと
p_{27}：ホッとしてます．やっぱり
r_{27}：そういう感じなんですね
p_{28}：孤独というのは言ってたし
r_{28}；うん，うんうん．孤独とおっしゃってたから，よけい仲間がいることはちょっと安心だったんだ．うん
p_{29}：で，その，あの，みんな仲いいっていう感じでもない，仲いいっていうか，やっぱり，こう，仲間っていう感じがしたんですよ
r_{29}：うーん
p_{30}：仲がいいっていうんじゃなくて
r_{30}：うん
p_{31}：仲がいいっていうか，こう，仲間，結びつきが，結びついているっていう，感じ
r_{31}：なんかベタベタする感じじゃないんだろうけれども
p_{32}：じゃなくて
r_{32}：でもきっと一緒には活動しているんだろうなという
p_{33}：そういう感じですね．なんか，こんな絵恥ずかしいですね．こんな感じです
（中略：この後，描画作業の片づけをしながら終了間際に以下のような確認がなされた）
r_{33}：うーん，あなたにとっては，先ほど，その，あの，違う世界ということを，こう，痛感させられる夢なんですけれども，それで，まー，見終わってからもすごく，感情がね，こみあげてこられたと思いますし，これで，ま，ほんとに最後っていうような印象も，改めてしたのかもしれませんけれども，そのことは，ま，こう大きな目で見ると，役に立つ
p_{34}：あっ，そう．
r_{34}：夢でしたか？どうでした？
p_{35}：そう，この夢を見て，よかった，よかったっていうか，役に立つ，私にとっては，よかったんです．

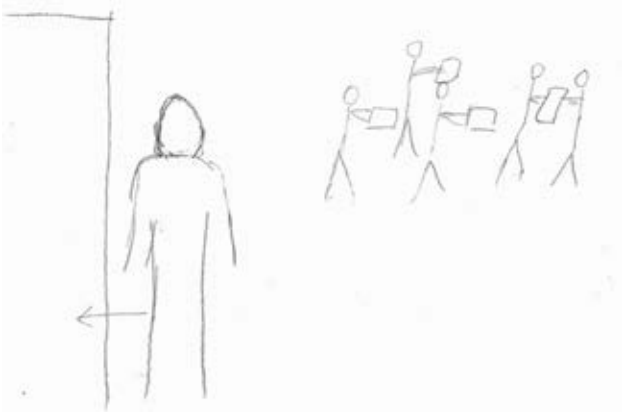

図３　研究協力者の夢の描画

Ⅵ．考　　察

研究協力者は，自死した夫の登場する夢の内容を，研究者に対してよどみなく話せていたことから，明瞭に記憶されていたことが伺えた．そして，研究者の求めに応じてその内容を語り描画することができた（図３）．図３の矢印は引き戸の開く方向を示し，夫は図の右上の5人のいずれかにまぎれている．研究協力者は，手前の後ろ姿である．夢に現れた状況は，音，温感，表情に至るまで報告されたことから夢見手によく把握されていたことがわかる．以下，報告された夢の内容でもとりわけ重要と思われる点について考察する．

１．夢中のメッセージ

１）引っ越しという状況設定と亡き夫の関わり

本事例での夢は，その舞台が自宅のドアを開けたところで展開していた．そしてそこで展開していたのは，引っ越しという生活感の濃い状況であった．この引っ越しという状況は，自死者が此岸から彼岸へと移動することを象徴していると考えることができる．しかも，この引っ越しという状況設定がリアルに研究協力者に届いていることがわかるのは，ザワザワ・ガタガタと表現されたその物音によって，この夢が幕を開けていることである．その物音で異変に気付いた協力者は，その後部屋のドアを開けて引っ越し作業に取り組んでいる複数の人物の中に自死した夫を認めていくこととなる．夫は間もなく彼岸へ向かうという状況にあることが，引っ越しという我々の日常生活の中にある場面を通して自ずから無理なく知られる設定である．この状況は誰が設定したのであろうか．亡夫はこの夢の中では一言もしゃべらないが，研究協力者の夢に登場し，研究協力者である妻と対面し，妻の問いかけに窮し，非言語のメッセージで返答していくといったかたちで妻との対話に臨んでくれている．このような引越しという状況を作ることにも主体的に関与していたならば，それは人が厳しい現実を受け入れて行くための絶妙な采配と言わざるを得ない．

2）亡夫による温感のないキスがもたらした意味

上のような状況設定の中にあって，研究協力者は，夫が黙って行ってしまうことに憤りを覚える．その気持ちを夫に向けるが，夫は，「表情としてはもう，なんか，どうしようもないんだよーみたいな・・・感じの表情で，黙って，こう，私の顔をジッと見て」p_{11-12}いたが，「で，そうっと，こう，キスをしてくれた」p_{12}と報告される．しかし，このキスは，「感覚のなにも，冷たくもあたたかみも，そういう，なんの感覚もない・・・キスで」p_{13-14}あったのである．そうして，この不思議な感触・温感が研究協力者にある解釈をもたらすのである．研究協力者が付与したこのキスの意味は，自死した夫が違う世界に行ってしまったというものであった．このメッセージがたいへんに厳しいものであるのは，研究協力者が「目の覚めた瞬間，こう，思って，なんかそこでもうワーって泣いちゃったんですけども」p_{17}と話していることから明らかである．別れなければならないことを亡夫は一言も発せず，困った表情を見せた後，温感のないキスを贈るという主体的かつ能動的な行為でメッセージを伝えた．そしてそれは，研究協力者と亡夫によって，夫は違う世界に行ってしまったという意味をもたらすことになったのである．

ここで着目しておきたいもう一つのメッセージは，研究協力者から亡夫に贈られた「黙って行っちゃうの」p_{9}という言語メッセージである．夢中でありながら，彼女ははっきりとそう尋ねることができている．研究者は，終わりのないなぜを抱える自死遺族に一番必要なことは，こういった自死者に直接自分の言葉でなぜかを問うことのできる機会だと考えている．仮に問いに思ったような答えが得られなくとも，自死遺族のカタルシスの上で重要である．夫の自死後，一般的には途絶えたとみなされがちな自死遺族と自死者とのあいだの対話的な関係が，夫婦の対話努力と研究者からの語る行為の励ましによって維持されていることがわかる．

3）安心できる仲間の存在

研究協力者の夫は，自死に至る数か月前から自分は孤独であると妻に訴えていた．実際には，趣味や仕事を通じての人付き合いが途絶えたわけではなく，夫の内面の心理だったかもしれない．しかしながら，その心情を配偶者の立場で聞かされていたことは，自分の存在がどのように夫に認識されていたのかという疑問にも当然につながるであろうことから，かなり辛い心境であったことが伺われる．今回の夢の引っ越しという状況には，夫と一緒に作業していた5，6人の仲間の存在があった．単に仲良しというのではなく何かで結びついている存在であるという．孤独を訴えていた夫は，自分と違う世界に行き，もう自分の手は届かない．しかし，そこでは夫に仲間がいると知ることは，配偶者をホッとさせることだろう．このような光景は，研究協力者を安堵させるに十分なものであるし，先の温感のないキスと同様に非言語的に伝えられる夫からのメッセージであると考えれば，亡夫の妻に対する配慮とみなすこともできるのである．

2．死者との交流を図る日本の伝統的慣習との違い

本邦におけるシャーマニズムの代表的な存在様式は，イタコやユタといって差し支えないだろう．いわゆるイタコの口寄せは死者の霊を呼び，自らに憑依させたり異界で死者と話したことを降霊を申し出た遺族に伝えたりするというやり方で死者を供養しようとするものである．本研究との違いは，媒介があるかないかである．媒介とはすなわちイタコでありユタである．夢は誰でもが見るものであり，特段の訓練や技術を要することなく死者と再会できる空間である．夢での死者との再会には媒介が不要である．本研究と伝統的慣習との類似点としては，死者に一人格を認め，何らかのかたちで接点を持とうとしている点である．

3．描画作業は必要か

今回のような十分な説明の得られる語りがあれば，描画は必要なのかと思うことがあっても不思議ではない．逐語の最後にも，研究協力者は思わず「こんな絵恥ずかしい」p_{33}と漏らしている．研究者自身もそうなのだが，絵を描くことには強い苦手意識を持っている人もいるので，なにがなんでも絵を添えてとはならないだろう．考察のはじめにも研究協力者は描画することができたと表現しているが，現実世界とは違う構造を持つ夢の世界の映像を記憶し，描画することは容易ではないのである．ただ，夢という個的内的なイメージを描画して現前化し他者と共有することには意味があるように思われる．研究者は，これまで自死遺族から話を聞いてきたが，どこかで自死者に申し訳ないような後ろめたいような気持になることがあった．それはおそらく，自死者の言い分を聞かずに一方的に遺族からの話を聞くことが多いせいではないかと思う．それが，自死者の絵が描かれると，研究者は自死遺族から自死者を紹介されたような気持になり，研究者と自死者のあいだにも関係が生まれ，申し訳なさが軽減されるのではないかと思う．ただ，この点では，写真でも同様の効果がもたらされることも想定され，描画が必須とは言い難い．しかし，写真は常に過去のある時に固定されるが，夢は見るたび更新される．

遺族にとってはどうだろう．研究者と面と向かって話すだけよりも，紙に向かい自分の夢のイメージを描いていくことで，イメージを確認し自分の考えや気持ちに向き合うことができるのではないだろうか．また，描かれたものを共有することで，質問もより具体的になりやすい．結果の逐語r_{25}～p_{35}までは描画作業しながらの研究協力者と研究者の対話であるが，その前に比べて一回の発話量が幾分減っているようだが，内容はより詳細になっているようにみえる．これらは，先に紹介した治療者と患者の対話を引き起こすきっかけ[11]として描画作業が機能していることを示し

ているのかもしれない．したがって，自死遺族が自死者の登場する夢を語る際の描画作業は必須ではないが，もし負担なく描くことができれば，研究者と研究協力者の双方にとって，語りを助けるものになる可能性はあるといえる．

4．ナラティヴ・イメージワークが自死遺族の喪の作業にもたらす意義

ナラティヴ・イメージワークが，自死遺族にもたらす最も強いインパクトは，それが夢中であっても，自死者との再会を果たせる機会を提供し，それを公然と研究者に向けて語り，示すことができる点である．自死遺族はさまざまな思いを抱え苦悩するが，当の本人と面と向かえることは，その思いを吐き出せるという点で有用である．

小此木は，悲哀の仕事を「悲しみと苦痛の心理過程を通して，はじめて対象喪失に対する断念と受容の心境に達することができる」[12]と解説した．自死遺族は唐突で一方的な別離によるコミュニケーションの中断を経験していることが多いため，断念と受容が格別に難しい．この難題をクリアするためには，是非とも自死者の力を借り中断されたコミュニケーションを復活させる必要があり，彼らに遺族が諦めることができるよう協力してもらう必要がある．ナラティヴ・イメージワークはそのための仕掛けである．この仕掛けによって，個的で内的なイメージであった一組の夫婦の終わりの物語は，自死遺族と自死者の夢中の再会についての研究者に向けた対話と場面描画の作業を通して，他者に閲覧可能な物語として書き下ろされたのである．このように本研究におけるナラティヴ・イメージワークは，自死遺族の喪の作業における断念と受容に対して，夢中の自死者の力を借りてイメージを意味づけする物語りをもたらすことができ，意義あるものとして位置づけられると考える．

Ⅶ．おわりに（謝辞に替えて）

本事例では，夢を通して自死した夫が配偶者に違う世界に行ったことを悟らせたり，仲間がいるので心配がないことを伝えたりして，遺族が前へ進むことを助けているように受け取れる．現在，研究協力者は資格を活かした専門的な仕事を続け，人生の歩みを続けている．繊細な報告ゆえ，研究者には公表にためらいもあったが，研究協力者からの後押しをもらい今回の報告に至った．研究協力者と彼女の喪の作業の進展に力を貸してくれた亡夫にこの場を借りて深謝したい．

本研究報告は，平成23年度科学研究費補助金（挑戦的萌芽）研究の助成を得て実施した結果，得られた事例の一つである．

引用文献

1）Hauser, M. J. : Special aspects of grief after a suicide. In Dunne, E. J., McIntosh, J. L., Dunne-Maxim, K. (eds.), Suicide and its aftermath : understanding and counseling the survivors. N Y : A Norton professional book. 1987, p64
2）高橋祥友：自殺のポストベンション－遺された人々への心のケア－．東京, 医学書院, 2004, p27
3）Freud, S.（髙橋義孝, 菊盛英夫訳）：夢判断（上）（下）．東京, 日本教文社, 1994
4）Jung, C. G.（横山博監訳, 大塚紳一郎訳）：ユング夢分析論．東京, みすず書房, 2016
5）木田元, 野家啓一, 村田純一他編：現象学事典．東京, 弘文堂, 2014, p454-455
6）渡辺恒夫：夢の現象学・入門．東京, 講談社, 2016, p12
7）Gergen, Kenneth. J.（永田素彦, 深尾誠訳）：社会構成主義の理論と実践－関係性が現実をつくる．京都, ナカニシヤ出版, 2004
8）White, M.（小森康永訳）：再会－悲哀の解決における失われた関係の取り込み－. White, C. & Denborough, D.(ed)（小森康永監訳）: ナラティヴ・セラピーの実践. 東京, 金剛出版, 2000, p28-42
9）Hedtke, L. & Winslade, J.（小森康永・石井千賀子・奥野光訳）：人生のリ・メンバリング－死にゆく人と遺される人との会話－. 東京, 金剛出版, 2005
10）吉野淳一：自死遺族の夢の中での死者との再会．家族療法研究25 (2) : 48-57, 2008
11）野口裕二：ナラティヴと描画．日本描画テスト・描画療法研究会編：臨床描画研究21. 京都, 北大路書房, 2006, p10
12）小此木啓吾：対象喪失－悲しむということ　中公新書557．東京, 中央公論社, 1997, p48